

自然保護 — WWFと地球環境の保全 —



イエンス・ウォールステット

WWF—世界自然保護基金—は一九六一年に創立されました。当時は野生生物と自然環境への危害を知る人は少なく、それを心配し、何らかの手段を講じたのはほんの一握りの人びとでした。

その若さにもかかわらず、WWFはいまや自然と環境の保全における世界的指導的なNGO（非政府団体）となっております。現在WWFはたとえばWWF—スウェーデンやWWF—日本をふくむ二三の国々の国内組織、及び四つの国に同様な組織をもっています。一九六一年以来、一三〇の国々で五、〇〇〇件の計画に対して資金を投じ、さらに三三五の国立公園や国立保護地区の管理に関与してきましたが、これらは地球の陸地の二パーセントにも及びません。

WWFの本部はスイスのジュネバ近郊のグランにあり、その建物は重要な協力者であるIUCN（国際自然保護連合）と対等の立場で共有しております。

エディンバラ公フィリップ殿下はたいへん活動的な国際WWF総裁であり、その資格で数回日本を訪問されています。カール一六世グスタフ・スウェーデン国王はWWF—スウェーデンの総裁であり、礼宮文仁殿下はWWF—日本の総裁、大来佐武郎博士は同会長であります。

つぎにWWFの使命とその保全計画を四つの時代にわけて説明しましょう。



WWF World Wide Fund For Nature

WWF International
CH-1196 Gland
Switzerland

図1 WWFのマーク

第一期のWWF

第一期には、われわれの保全へのメッセージを一般につたえ、消防作業に必要な資金を集めることからはじめ、最初にはたとえばサイ、トラ、ハヤブサのような危機に瀕した美事な種をはじめ、全世界の数千の種を救うことに集中しました。「クジラやその他の種を救え」というわれわれのキャンペーンは自然保全思想の先頭に立ち、めざましい成果をあげました。一例をあげますと、WWFは南米アンデスのラマ（ビクーニャ）を一〇、〇〇〇頭以下から一〇〇、〇〇〇頭をこえる健全な数に増やし、また全世界で二六〇余の国立公園と保護地区の設立を支援いたしました。現在WWFは三三五地区を支援しています。



図2 象



図3 サイ

第二期のWWF

しかしわれわれはすでに第一期から間もなく、種と保護地区に努力を集中することは不十分であることを知るにいたりました。重要な生態系に注意を払う必要を痛感し、第二期においては、たとえば熱帯降雨林、湿原、マングローブ、南極と北極、それにサンゴ礁などの地域の保護に当るようになりました。もう一度繰返しますと、これがわれわれの使命と計画の第二期を示すものであります。われわれのもっとも強い動機は過去も現在も、道義的なものであります。

第三期のWWF

しかしより広い支持を得るために、われわれはまた自然保護の社会経済的な関係をとり上げる必要に迫られました。その結果WWFはその使命の第三期

に入りました。

すなわち、世界保全連合(World Conservation Union)や国連環境計画(UNEP)と協力して、WWFは世界保全戦略(World Conservation Strategy)を樹立しました。この戦略は長期にわたる保全と開発とは対立するものではなく、その逆に相互に協力し合うものであることを初めて示した点で、ユニークなものであります。一例をあげますと、これらの水田を持続させるには、近隣の森林からの規則正しい水の供給が必要であります。

この戦略が政策決定者たちの注目を惹くように、世界の三二の首都において一九八〇年五月五日同時に、それぞれの国や政府の首脳部の出席した記者会見でその発表が行われました。それ以後WWFは各国がそれぞれの国の保全戦略を進展させるのを助け、また基本的な経済的、社会的要求を述べる保全開発計画のモデルを供給してきました。

例えばパナマでは、WWFはクローナ・インディアナが伝統的、非破壊的な方法で彼等の伝統的な故郷——熱帯降雨林——を管理する努力を支持しました。また東アフリカと南アフリカでは、国立公園における観光収入はその地域の人びとのために用いられるべきとの考え方を推進しました。ジンバブエでは、WWFの主要計画によって野生生物管理をおしよめ、それらの産物を持続的に供給し、地域での消費と輸出とを可能ならしめました。

しかし、WWFや他の保護組織の成功にもかかわらず、地球上の生物資源に対する圧力は増加しつづけています。正しく、われわれは地球上のすべての生命を飲みこんでしまう環境破壊の加速度的な潮流に直面しているのであります。この美しい森林も破壊され、実り多き湿原も枯渇し、これらの美事な珍

奇な種も死滅しつつあります。さらに大気までが汚染されつつあります。

病気を治療するかもしれない植物や動物も、それを研究する機会もないままに破壊されようとしています。毎年数百万の人びとが、基本的な要求すらも満たされない貧困の中に生れて来ます。

それにも拘らず、これらの問題を解決するために、何かをしなければならぬという自覚が民衆や政治のリーダーたちの間に最近急激にわき上りつつあることは、こころ強い事実であります。WWFは永年の間、その出版物、ニュース・メディア、それに一般へのキャンペーンや高いレベルでの主張などを通して、このような自覚を生ぜしめる努力を一つづけてきました。

その結果、ついにニュース・メディアもこの事実をまじめに取り上げるようになりました。もちろん、自覚だけでは不十分であり、これは関心、それから保護にすすみ、さらには行動に到らなければなりません。その関心は高まりつつあります。

最近の世論調査によれば、ヨーロッパ人の七二パーセントが汚染はきわめて緊急重要な課題と考えています。同じことは最近ソビエトで行われた調査でも明かになっていきます。ペレストロイカ(改革)とグラスノスチ(公開)の結果、環境問題はソビエトでも盛んに議論されております。

一九八八年一月イギリスで行われたギャロップ世論調査によれば、環境への損傷は人類への最大の脅威として世界戦争と同列にとらえられております。発展途上国においてもまた、環境問題は政府から村落レベルにいたるまで、ますます論じられるようになりました。

WWFの役割は、増加しつつある自覚や関心を、

行動に移すことにあります。このためにわれわれのもっとも大きな力となるのは世界中における各国の協力あるいは同盟組織とのネットワークであり、また一九八三―一九九〇年の六年間に百万人から四百万人に増加した支持者ベースであります。各人が自然と環境を守る上で、いかに積極的な役割を果たしうるかを示すことによって、このベースをさらに拡大することを心掛けています。

われわれは各国政府がそれぞれの国内の政策と、例えば国際熱帯木材協約（ITTA）のような国際条約への関与をすすめるように働きかける努力を高めてゆきたいと思えます。この熱帯木材協約では、WWFはその創設に重要な役割を果たした上、触媒的な助成金も支給しております。われわれは絶滅に瀕している豹の毛皮やサイの角や象牙などの売買を制限するCITES（日本では一般にワシントン条約とよぶ）の支持をつづけます。

もちろんWWF単独では、世界の諸問題を解決することはできませんので、いまある各団体との連絡を深め、さらに新しい連合をつくろうとしています。

WWFの総裁の発案で一九八六年アシンで創立二五周年を祝し、ここで全世界の指導的宗教団体の代表との連合を確立しました。われわれはこの連合をつよめ、他の形の生物も、人間と等しくこの地球上に生存する権利があるという原則を深く尊重することを強調します。

われわれはまたユネスコとの協力を押し進め、たとえばネパールの自然保護地区のエベレストやサガマルタ、タンザニアのニゴロンゴロ保護区などの世界遺産財産地区（World Heritage Sites）の確立と適切な管理を行いたいと思えます。もっとも最近のキャンペーンは、人間の健康や食料、産業のため

に生物種の多様性を保全することが重要であること示そうとしています。このキャンペーンでは、世界健康機構（WHO）と協力し、さらに製業や食料産業とも連携しております。WWFは産業との提携においては、それぞれの会社がマーケットを得るのに成功するように助力しており、会社もまたWWFの支持はスーパーマーケットや株式取引所において、彼等の関心を表明してくれると認めるようになりまし。

たとえばウォールストリートジャーナルは最近「増大する消費者の圧力は環境保全製品の経済的発展性を強化する」と書いています。

われわれは天然資源の保全と賢明な利用とは、すべての人びとの道徳とライフスタイルの一部となるべきだと信じています。WWFは発展途上国に適切

な考え方や能力が育つように、訓練や教育計画と通じ、また地域の機関に助成金を与えて援助しつづけています。

しかしもしわれわれが他の人びとと協力し、資源の消費、汚染、そして指数的な人口増加などをふくむ環境破壊の根源の原因にとりくまない限り、われわれの努力はすべて無に帰してしまわうでしょう。

第四期のWWF

WWFの第四期の発展は、われわれの使命を拡大しこれらの根源の原因にとりくむ科学的計画をたてることにあります。一般市民に助言的なサービスを行って、消費的使用や汚染の諸問題にとりくもうとしています。また政府や産業界にいかにして自然と協調して作業しうるかを示し、支持者たちがそれぞ

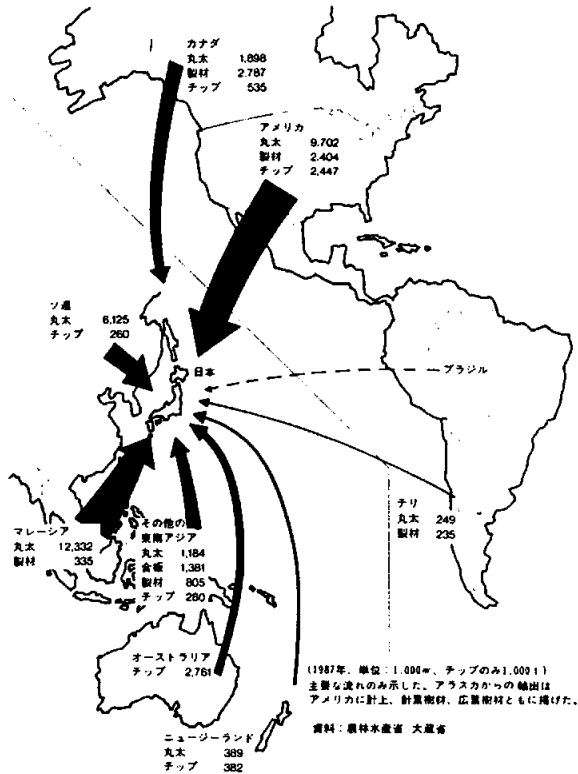
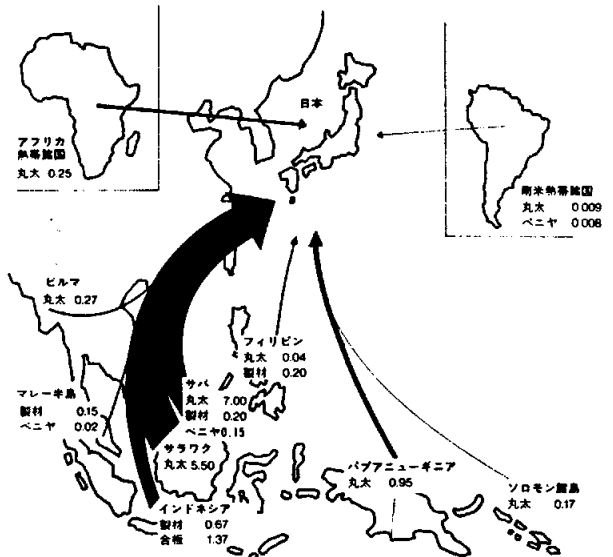


図4 環太平洋諸国—主要な日本への木材供給源

日本の熱帯木材総輸入量(1987年) 単位: 百万^円

	数量	丸太換算量
広葉樹材丸太	14.00	14.00
針葉樹材丸太	0.15	0.15
広葉樹材製材	1.26	2.33
針葉樹材製材	0.14	0.23
広葉樹材ベニヤ	0.29	0.55
広葉樹材合板	1.48	3.36
合 計		20.62

パルプ材は含まず。単位はすべて百万^円
丸太換算はFAOの換算率を使用



資料: 通関統計 1988年 日本合板工業組合連合会

図5 日本への熱帯木材主要供給国(1987年)

れの地域問題を解決するように働きかけてゆきます。

さらに教育計画を通じ、保全と開発プロジェクトにおいて、家族計画組織の活動を支持いたします。

最後に、多数の日本の重要な方がたが本日ここに来られた機会に、世界におけるもっとも強力な国の一つである貴方がたに一つのお願いをしたいと存じます。第三世界の発展と保全とは工業国からの援助によるところがきわめて大いのであります。過去において貧しい国々は富める国々によって、あまりにも開発されてしまいました。第三世界の人のびとの多くが、重い外国からの借財、貧困、そして破壊された環境の重荷を背負わされています。彼等はこの悪しき循環を立ち切るために、われわれの援助を大いに必要としています。

その一つの例として、—それは非常に重要な例で

すが—私は熱帯林の場合を強調したいと思えます。

熱帯林は一億年以上の長い間進化をつづけてきました。その故に熱帯林には世界でもっとも豊かな生態系が生存しております。そのため、熱帯林は地球陸地の七パーセントを占めるに過ぎないのに、地球上のすべての種の半分以上がここに生きているのです。

熱帯林が急速に伐採されていることは、このユニークな生物学的変異への大きな脅威となっています。

現在、熱帯林は年間を通して、毎分三〇ヘクタールの割合で消滅しつつあります。つまり毎年、本州の四〇パーセント、あるいは全北海道に相当する面積がなくなっているのです。過去二〇年間で、熱帯林の半分以上が失われてしまい、もしこの破壊を停止させるためにわれわれが何かをしない限り、その残

りも二〇二〇年を待たずに消滅してしまうでしょう。その結果はすでに悲惨なものでありますが、二〇五〇年以前に主に熱帯降雨林の破壊によって、地球上の種の1/3あるいは1/2以上が失われてしまふでしょう。またこの森林伐採の結果、パングラデッシュ、インドそれにタイなどにおけるように、洪水や浸食が大きな災害をひきおこすでしょう。

日本の産業界は、工業国によって行われる熱帯硬質木材の全貿易量の半分以上に責任があります。このことは、最近「南洋から来た木材」と呼ぶ日本の熱帯林売買に関するWWF報告で詳しく明かにされております。

WWFに代り、われわれはこの機会をとらえ、熱帯降雨林の現在の破壊について責任を感じておられる皆様方すべてに訴えたいと思えます。この熱帯林の破壊を遅すぎないうちに減少させるため、日本を含む工業国に対して影響を与えるように最大の努力を試みていただきたいのです。とりわけ、国際熱帯木材組織(IITTO)の一員である日本として、森林の持続的利用の開発や破壊された地域への植林を開始し、その指導をとっていただくことを要望いたします。

終りにあたり、この講演とWWFの見解をきいて下さった皆様に感謝したいと存じます。われわれすべては、宇宙において生命の存在が知られている唯一の惑星である地球に対し、責任をわから合うものです。自然保護と開発とは競合するものではなく、相互に依存し協力し合うべきものです。皆で地球上のすべての生命のために、そして将来の世代のために、自然の保護とともに貢献するよう努力しましょう。

(八木健三訳)